りびんぐらいぶず　R４(2022)年3月第3号

称即名と巻き上がる

◆ご讃題

◆たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称せずは、正覚を取らじ。

(Ref『仏説無量寿経』「第十七願」註釈版聖典 p18)

◆十方恒沙の諸仏如来は、みなともに無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讃歎したまふ。あらゆる衆生、その名号を聞きて信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまへり。かの国に生まれんと願ずれば、すなはち往生を得、不退転に住せん。

(Ref 仏説無量寿経　巻下　註釈版聖典 p41)

◆はじめに

布教使の御法話が終わるときお聴聞の皆様の誰からともなくナンマンダブツのお声が沸き上がってきます。私が経験したのは瓜生津隆眞先生に付いて興正寺の旧会館にお参りし先生と西本宗助先生との御法話をお聞かせ戴いたときでありました。三十年近く前の出来事です。お同行の皆様から自然に潮騒のようなお念仏をお聞かせに与るということがどれほど温かいコミュニティを形成していたかはお聴聞のご法座でお声が聞こえなくなった昨今になって初めて気付くことです。

残念に思いつつ改めて「皆様お念仏ですよ」と住職はお参りの皆様にご案内するのです。

◆桐溪順忍和上の説

空華学轍最後の和上、桐溪順忍和上は、大行論の中心問題について詳しくお説き下さっています（Ref 教行信証に聞く(上)（「聞く」と略称）。

大行論の中心になる問題は、行巻に**「諸仏称名の願」**といい、「この行は大悲の願より出でたり、即ち是れ諸仏称揚の願と名く」などと第十七願が出され、六字釈、信巻の信心正因の説明からみると、諸仏の称名（名号）が大行であると言わざるをえないのであります。そこに**名号大行説（所行説）**がおこるべき論理があるのであります。

(考察)なぜ諸仏の称名を名号というのか。法体名号だからでありましょう。

しかるに、行巻のはじめには**「大行とは則ち無碍光如来の名を称するなり」**とあり、御自釈には「しかれば、名を称するによく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ」等とあって、大行は明白に衆生の称名であると言われております。特に聖人ご自身が「大行とは称名である」と決定されているからそれに従わなくてはならない。しかも、念仏往生ということは、善導大師、法然聖人以来、浄土教の根本主張であり、親鸞聖人も常に念仏往生と

仰っているのであるから浄土往生の大行は称名でなくてはならないことから**称名大行説(能行)**がおこる理由があるのであります。
行巻になぜこのような矛盾した説があるのであろうかということになるが、それは他人が云うことで著者(親鸞聖人)にとっては、決して矛盾とはお感じにならなかったものでありましょう。すると、諸仏の称名(名号)と衆生の称名とが受け取られていたのが行巻の立場であらねばならないのでありましょう。
この明白な論理が自覚的に論ぜられるようになったのは、空華轍の松島善譲(1806～1886)、利井鮮妙(1835～1914)と云ってよいようであります。この論理を解明することによって、行巻を理解する端緒ととらえることができます。

行巻でその中心になるものは標挙の文とみるべきでありましょう。これは親鸞聖人が行巻で説く内容をお掲げになったものだからです。大行の完成された願を出すところに第十七願が出されてあります。もし、衆生の称名だとすれば、当然「乃至十念」の称名によって第十八願が出されねばならないのでありましょう。第十七願を出された点からみて、諸仏の称名であり、私には「聞きもの」の称名が中心だとみるべきでありましょう。
◆ではなぜ、大行とは何かを決定するところに「大行とは無碍光如来の名を称するなり」とか、衆生の一切の無明を破し、衆生の一切の志願である往生成仏のさとりをひらくのは称名による(称名破満)と説かれたのであろうか。そこに親鸞聖人の念仏観の特色があるのではないでしょうか。この称名念佛観の理解を通して親鸞聖人の晩年の念仏往生の意味も十分理解することができるのではないでしょうか。
◆親鸞聖人の称名念佛観には、明らかに二つの取扱い方があります。
①一つには称名報恩の思想であり、
②今一つは称名往生(念仏往生)の思想です。

しかも、法然聖人よりうけついだ称えるという意味での称名は、むしろ称名報恩の立場となして、念仏往生(称名往生)という場合は、唱える立場ではなく、称えながら「聞く」立場であって、むしろ新しい聖人の念佛観によるものであるとみるべきであり、その新しい念仏観、称名観がこの行巻に明白に示されているのであります。

この称名観の理解なくして、称名念佛を全く善導大師、法然聖人のものと同一に考えたから能行･所行論争が現れたので、これを理解すれば、名号と称名とは全く同一のものであることが理解できるのでありましょう。

善導･法然二祖の念仏往生の思想は、私の称える称名で往生決定するというものです。
なぜなら、法然聖人の伝記に示すように善導大師の『散善義』の「彼の仏の願に順ずるが故に」の文によるものです。念仏を称えたらどうして往生できるかと云えば、「阿弥陀如来の本願に、念仏した者を必ず往生させる」と誓ってあるのだから、その願に従って念仏すれば往生で

きるという論理であります。だから口に仏名を称えたら往生できると主張されたのです(Ref「聞く」p141～p145)。

◆親鸞聖人のお立場

法然聖人の没後、親鸞聖人は、法然聖人のみ教えの正しさを主張するために、お念仏を「仏の御名に帰することである」と捉え直し、「善導大師の六字釈に粘り強い字訓を重ねて、南無阿弥陀佛の六字は、本願招喚の勅命であり、往相回向と還相回向の本願力回向だと明確化され、発願回向釈では「如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり(Ref 註釈版聖典p170)」とお示し戴いたのでした。

桐溪和尚は、「南無阿弥陀佛の六字全体が衆生を喚び覚ます本願招喚の勅命であると解釈する六字釈は、衆生の称名に大きな意味の転換を与えた」と仰せであります。

称名とは、普通には衆生から如来に申し上げるものだと考えられていたのに、称名とは、私の口を通して出て下さる「如来様のお喚び声」だとみるところに、衆生の称名が諸仏の称名(名号)と同価値になる（称即名と巻き上がる）ところが現れるのであります。自分が称えながら自分の口を通して如来様のお喚び声が現れるという思想が親鸞聖人の称名観の一つであり、最も特色のあるものであります(「聞く」p147)。合掌。

◆前住十七回忌＆永代経三月五日(土)十時半～

◆春の彼岸会　三月二十一日(月) 十四時、十九時半～

今月の仏壮お聴聞の会は当初六日の予定でしたが、永代経に合同し、仏婦の例会(お聴聞の会)は当初十六日の予定でしたが、春の彼岸会に合同して営ませて戴きますので、ご了解下さい。

お聴聞は、浄土真宗では、何はさておき継続して実施すべき大事の営みです。一方、コロナがピークアウトしつつあるとは言え、なるべく大勢での会合は控えさせて頂く為の苦肉の策であります。

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地
電話 077-596-0166、FAX077-596-0196 住職堅田 玄宥